

## 質の高い大学教育推進プログラム 実施状況報告書

大 学 等 名	鹿児島純心女子大学		
取 組 名 称	英語新時代を拓く教師養成モデルの構築		
申 請 区 分	教育課程の工夫改善を主とする取組		
取 組 期 間	平成20年度～平成22年度（3年間）		
取 組 学 部 等	国際人間学部（英語コミュニケーション学科、こども学科）	取 組 担 当 者	川上典子
W e b サ イ ト	<a href="http://www.k-junshin.ac.jp/jundai/GP3/index.html">http://www.k-junshin.ac.jp/jundai/GP3/index.html</a>		
取 組 の 概 要	<p>本取組は、小学校の外国語活動の必修化に伴い、時代のニーズに合った教師養成モデルを構築することである。本学の関連講義を小学校教員にも開放することで、学生は教員との共学により深く学び、また学外実習等により地域ニーズを踏まえた実践的指導力をつける。さらに、学生が英語イベントにスタッフとして参加することで幅広く実践力を身につけ、それが小学校英語指導の即戦力となり、今後地域のリーダーとして育つことを期待する。</p>		

### 1. 取組の実施状況等

#### ①取組の実施状況

##### (1) 取組の実施体制

マネジメント体制は、Kids Englishプロジェクト推進委員会を設置し、年2回の委員会を開き立案や推進を行った。構成は、学長、副学長、事務局長、学部長、学科長を含め13名の教職員と3名の外部委員である。実際の企画運営は、学部長と7名の教職員でKids Englishプロジェクト推進委員会ワーキング・グループを作り、月に1、2回の会議を開き取組を進めた。また、支援体制としては大学に教育GP委員会がある。

##### (2) 取り組み実施計画に掲げた内容

###### ア 「こども英語教育能力認定証」関連の授業の開講及び認定証の発行

16科目開講し、関わる教員は17名。学生は12科目（23単位）以上を履修し認定証を受領する。取得学生は取組期間3年間で計55名。小学校教員取得者2名。

###### イ 「こども英語I・II」の一部を「BRUSH-UP純心セミナー土曜講座」と称して土曜開講し、小学校教員との共学の場の提供

取組期間3年間で土曜開講数は45コマ、関わった講師教職員数は、延べ74名、受講者数は867名。

###### ウ ニーズ調査のためのアンケート作成、調査実施、分析、それに基づく教材開発

アンケート作成・集計に関わった学生は50名、教職員は4名。その結果を基に「こども英語教育教材開発演習」を新設し、教員2名と外部講師を延べ6名招聘し、教材開発を行った。受講者は2年間で42名。

###### エ 大学祭での企画として地域の児童を集めての「キッズ・イングリッシュアワー」

平成21・22年度に行い、学生は計42名が企画参加し、来場の児童は22名。

###### オ 「夏季小学校英語BRUSH-UP純心セミナー」の開催（平成21・22年度）

取組期間中2日間の講座を行い、外部受講者は延べ計309名、運営に参加した学生数は29名、教職員32名。

###### カ こども英語キャンプへ学生のボランティア参加（平成21・22年度）

市の主催する小中学生対象の英語キャンプ2回に学生が計12名参加し支援。

###### キ 学生スタッフが企画運営に参加するスキットコンテストの開催（平成20～22年度）

3回のコンテストへの出場チーム数は計56チーム、来場者は延べ計702名、スタッフ学生は計36名、教職員は12名。

###### ク 英語教育フォーラム開催（平成22年度）

小中高教員が175名来場し、ボランティア学生が6名と教職員10名で運営。

###### ケ こども英語教材開発室(イングリッシュ・ラウンジ)の設置

教材開発や語学授業以外は学生に開放しているので、延べ学生利用数は3年間で11,751名、延べ教職員利用数は、1,977名。

##### (3) 社会への情報提供活動

HPに教育GPのサイトを作り、取組内容や活動計画、活動報告を行った。本学科目を土曜講座として地域の小学校教員に解放し、学生と共学の場を作った。また、全国英語教育学会や九州英語教育学会の研究大会等で事例発表やポスター発表を行った。さらに、大学教育改革プログラム合同フォーラムにてポスターで紹介をした。

## ②. 取組の成果

### (1) 実践的な指導力育成

学内講義「こども英語Ⅰ・Ⅱ」を小学校教員にも開放し、学生との共学の間を作り、また外部講師を招聘するなどして様々な視点から授業を行った。アンケートによると、授業を受ければ受けるほど、実習授業への「できる」と思う自己肯定感が増している。(小学校英語活動の内容及び実状についての知識、教材作成及び授業実施に関して、未履修グループと履修中・履修済みグループの2群間で有意差が認められた( $p < .001$ )) 学外実習においては、前期「児童英語演習」として学生は授業観察を中心に授業の流れを掴み、指導の技術と児童理解を行った。その上で、後期は「児童英語教育実習」で教壇実習を各学生3回行った。実習は、授業をプランし、担任教師と事前打合せを行い、授業をビデオに撮り、大学でそれを振り返りながら授業研究を行った。このプロセスにより、少ない回数でも、次の授業ではかなりの授業改善が見られ有効な実習ができた。授業に対する評価は自己評価、学級担任や大学担当からの評価である。今後、さらに客観的な評価法を開発したい。教材開発では、学生が市の年間計画に沿った内容のデジタル教材を作成した。

### (2) 「こども英語教育能力認定証」の取得

こども英語の関連授業の取得によって「こども英語教育能力認定証」を発行している。認定証を小学校教員にも開放することで、小学校教員が本学の土曜講座や夏季小学校英語BRUSH-UP純心セミナーを繰り返し受講する動機付けになった。平成22年度には小学校教員2名の認定証取得者が出た。地域の小学校教員にも小学校英語に関する多くの知識と技術を得る研修の間を作り、活性化が図られた。

### (3) イベント企画力の向上

即戦力となる指導者養成を叶えるために、授業以外での英語関連イベント等への企画運営に関わることで対人コミュニケーションやリーダーシップの能力向上を目指した。アンケートの結果、明らかにこれらのイベントに参加することで授業では得られない臨機応変に対応する能力等が磨かれ、実習授業に対して「できない」感が減っていることが分かった。キッズ・イングリッシュアワーでは、自分たちの企画に対しどのように児童が反応するか、どう関わるべきかその場で体験できた。こども英語キャンプに参加した学生は地域のこどもと寝食ともに3日間過ごすことで、児童理解が深まり、英語での活動方法を学び自信をつけることが出来た。スキットコンテストでは、全体を見渡しながら、自分の役割をこなして行ったり相手が何を求めるか考えながら動いたりすることが出来るようになった。コンテスト自体が地域の英語力を活性化する一つのイベントになりつつあることは、良い波及効果といえる。

### (4) 地域の教員や児童への動機付けの機会の提供

Kids Englishプロジェクト推進委員会の外部委員より、地域の小学校教員の研修の間の提供や市主催の小中学生対象の英語キャンプのボランティア学生の参加、さらに児童への動機付けとなるスキットコンテストの開催等大変好評を得ている。さらに、毎年開催される市と大学の懇話会においては、本学の取組が市の英語教育の活性化につながっている旨の言葉をいただいている。

### ③. 評価及び改善・充実への取組

#### (1) 取組の評価・改善体制の構築

組織としての取組の評価を適切に行うための体制を整備するために、「Kids English プロジェクト推進委員会」（以下、推進委員会）に加え「第三者評価委員会」を設立した。

第三者評価委員会は、鹿児島県教育庁指導主事、総合教育センター指導主事及び鹿児島大学教授の3名で構成され、年度末に1回開催された。

2年目以降の推進委員会は、第三者評価委員会の評価を基に取組を改善・充実について検討を行い、更に取組の推進に当たった。実際の企画運営は、推進委員会の下にある「Kids English プロジェクト推進委員会ワーキング・グループ」で行った。第三者評価委員会は、取組の適切な運営・実施について、取組の全体評価、関係各部署の評価、取組の教育効果の評価を行った。

#### (2) 評価・改善体制の機能と取組・学習成果の測定の方法及び指標

評価に当たっては、推進委員会による開始前の計画（Plan）、シラバスに即した実施（Do）、第三者評価委員会による細かな評価（Check）に基づき、取組を改善し、更に実践を継続（Action）するというPDCAのステップを大切にして、取組が有効かつ適正に実施されるよう適宜細かな配慮をしてきた。

実習の評価には学生の授業案、学生のレポート・小学校教員へのアンケートの結果、実習先の担任教師による実習評価等を利用した。さらに、本取組の全体を評価するものとして、認定証関連科目を受講している学生へアンケートを平成22年1月から12月にかけて行った。これは、履修した科目、参加したイベントなどを通して学生がどのような知識やスキルを身に付けたと感じているかを調査するものである。結果は、科目の履修数と教授力は比例しており、イベント参加回数と企画力も比例していた。科目を履修するほど自信を持って英語活動の授業を行えるようになり、また、イベントに参加経験があれば企画運営の「できない」感を持たなくなると言える。

#### (3) 第三者評価委員会及び日本高等教育評価機構の認証評価の評価内容

本学は、設立時から英語教育に力を注ぎ、教員養成及び小学校英語も強力に推進しており、平成18年度に文部科学省から「小学校英語活動地域サポート事業」を委嘱され鹿児島県内の小学校の英語活動指導者を対象にして指導力向上のためのワークショップを開催し、更に、平成19・20年度の夏休みに小学校英語BRUSH-UP純心セミナーを開催し、小学校教員の支援を続けているところである。このような背景の中で今回の取組が選定され、内容を更に充実させてきた経緯がある。

第三者評価委員会の意見として、これまで委員会で出された課題等にきちんと対応し、開講している講座の質が高く、参加者が増えている点は素晴らしいとの講評があった。

なお、平成22年度に財団法人日本高等教育評価機構の大学機関別認証評価を受け、次のような記述をもらい【優れた点】として高い評価を受けた。

「文部科学省の大学改革推進等補助金に関し、現代GP、教育GP、学生支援推進プログラムに連続して採択されていることは大学の個性化と教育研究の充実に向けた努力の成果であり評価できる。」

#### ④. 財政支援期間終了後の取組

##### (1) 取組体制

取組の体制は、Kids Englishプロジェクト推進委員会及びKids Englishプロジェクト推進委員会ワーキング・グループは、縮小した形で、必要に応じて会議を開いている。ただし第三者評価委員会は、その必要性は無くなったことを受けて解散した。

これまで開講してきた科目については、すべてこれまで通りに開講している。特に、「こども英語教育能力認定証」の関連授業科目は継続して開講している。しかし、「こども英語I・II」は、これまで学期に3回は土曜に時間を変更し小学校教員にも開放して「小学校英語BRUSH-UP純心セミナー土曜講座」として開講していたが、今年度は回数を変更し学期に1回(3コマ)にした。また、「こども英語教育教材開発演習」では動画を含むデジタル教材の開発に力を入れてきたが、自前のできる教材開発を工夫し作成していく予定である。

また、本学主催の英語関係イベント「夏季小学校英語BRUSH-UP純心セミナー」、「スキットコンテスト」「キッズ・イングリッシュアワー」も継続して行う予定で準備を進めているところである。

##### (2) 財政措置

「こども英語I・II」については、これまで学期に3回(9コマ)行ってきた外部講師による講座を予算措置が取れないこと、また、土曜講座開講に伴う事務処理にかかる人件費が取れないことから、本年度から学内の講師によって規模を縮小せざるを得ないという状況になった。

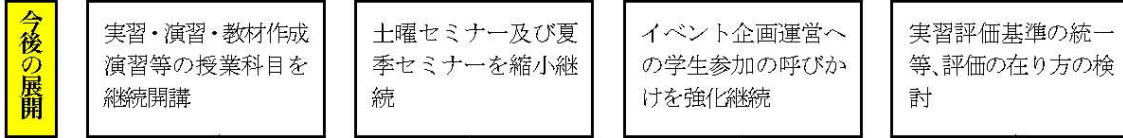
本学主催の英語関係イベント「夏季小学校英語BRUSH-UP純心セミナー」と「スキットコンテスト」、大学祭で行う「キッズ・イングリッシュアワー」については、大学主催のイベントとして予算化したところである。さらに、「夏季小学校英語BRUSH-UP純心セミナー」については、これまで行ってきたプログラムと同様の質を維持するために参加者から受講料を徴収する予定である。

##### (3) 今後の課題と改善

課題としては、これまで築いてきた授業やイベントが学生や地域の教員から熱い支持を受けていることを考えると、予算が無いからすべて廃止にするわけにはいかない。内容によっては規模を縮小してでも継続することになるが、少ない予算でいかに質を維持して学生や小学校教員に魅力ある内容にするかがこれからの大きな工夫のしどころと考える。

教師養成においては、大学の講義で学んだことを如何に授業に反映させ、さらに指導技術を伸ばすかが大きな課題であると考え。そのため本学では、授業外でもイベントへの企画運営に参加させることで実践力をつけ、また、効率的に実践的指導技術が身につくよう小学校での演習・実習に力点を置き、録画した授業をビデオで振り返る等の方法を工夫してきているが、さらに改善する余地はある。そのひとつは、現実には大学が望む程に学生のイベントスタッフ参加数が多くないことである。また、実習指導に複数の大学教員が当たっているが、その中で評価基準があまり一定していない。より実践的な教師養成に向けて、これらの点を改善していきたい。

## 2. 取組の全体像



平成 22 年度事業及び 3 年間の取組に対する評価

- 1) 第三者評価委員会で指摘された点や助言を次年度で改善しようとする姿勢が良い。
- 2) 実習におけるビデオを使用したフィードバックの方法等、評価できる。
- 3) セミナーは講師陣及び内容の質が高く、参加者も増加傾向にあり良い。
- 4) 学生が教材作成のノウハウを学べており、今後の小学校教員に必要なものである。
- 5) 実習に対する評価項目を増やすべき。
- 6) セミナー等、是非継続すべき。

3年間の成果

- 1) 学生の実践的な指導力育成：学生の「できる感」が上昇、作成電子教材のHP掲載（ダウンロード可）
- 2) 「こども英語教育能力認定証」の取得：学生 55 名、外部参加者 2 名
- 3) イベント企画力の向上：学生の「できない感」の降下
- 4) 地域の教員や児童への動機付けの機会の提供

主な平成 21～22 年度実施事業	延べ参加数
1) 「こども英語演習」実施	35
2) 「こども英語教育実習」実施	31
3) 「こども英語教育教材開発演習」で教材作成	42
4) BRUSH-UP 純心セミナー土曜講座開講	707
5) BRUSH-UP 純心セミナー（夏季）開催	309(29)
6) 英語教育フォーラム開催（22 年度）	175(6)
7) 英語キャンプへの学生ボランティア参加	12
8) 「Kids English Hour」実施	22(42)
9) スキットコンテスト開催	35 チーム(26)
10) Jazz Chantz Workshop 開催（21 年度）	42
11) 電子教材を HP に掲載（22 年度）	
12) English Lounge の活用	11751

平成 21 年度からの改善点

- 1) アンケート調査項目の修正
- 2) 学生へのイベント参加呼びかけ強化
- 3) 市教委やメディアへの広報活動を行う。
- 4) HP へ学生作成の電子教材を掲載した。
- 5) HP 掲載を迅速に行うためセミナー計画等を早めた。

平成 21 年度事業に対する評価

- 1) スムーズに取組を進めている。
- 2) 広報を教育委員会などへも行うべき。
- 3) 学内事業を HP などで積極的にアピールすべき。
- 4) アンケートで実習前後の学生の変容を調査すべき。

平成 20 年度からの改善点

- 1) 21 年度は実習校を 1 校から 3 校へ増加
- 2) 純心セミナー土曜講座の開講日程を変更
- 3) 外部の参加者のために「認定証」の手引きを作成
- 4) スキットコンテストの計画準備の開始の早期化
- 5) スキットコンテストの日程を改善
- 6) HP への掲載記事及び掲載時期や場所を改善
- 7) English Lounge の充実・活用範囲拡大

平成 20 年度事業に対する評価

- 1) 社会のニーズを押さえた取組である。
- 2) 学生の質の向上のみならず、地域の活性化を視野に入れている点が評価できる。
- 3) 短期間でスムーズに事業が進んでいる。
- 4) 学部教員の広い参加を促すべき。

主な平成 20 年度実施事業	延べ参加数
1) 学習環境の整備：English Lounge の設置	417
2) 「こども英語教育実習」実施	15
3) BRUSH-UP 純心セミナー土曜講座開講	160
4) 「認定証」を小学校教員へも開く	
5) 小学校英語に関する意識調査	250 校
6) スキットコンテスト開催	21 チーム(10)

\* ( ) 内は学生ボランティア数

事業目標  
基本方針

事業目的の設定：学生のこども英語教育能力の開発・向上  
基本方針：学生の実践的教育能力の育成・リーダーシップの育成  
活動内容：学生の実践力育成活動・学生のイベントの企画運営への参加・学生と現職小学校教員との共学